

ゼロ距離

旭川市立緑が丘中学校 二年 上田 百恵

私には友達がいる。今年の四月、学年が上がるタイミングでこちらにやって来た、転校生。明るくて優しい、見た目も性格も可愛い女の子だ。

正直に言って、私とは本当に真逆のタイプだから、初めはとまどいが大きかった。しかし話してみればただただいい子で、仲良くなれて良かったと、心から思う。

ただ、一つだけ、その子に関して悩むところがある。

友達になったら、まず何をするだろう。そもそも自然と友達になった場合は、それを考えることすらないかもしれない。

私達は移動教室と一緒に行くところから始まって、休み時間に他愛ないことをしゃべったり一緒に帰ったりした。徐々に、けれど確実に私達の距離は縮まっていた。

しかし、まだある。なかなかうまくまらない、見えない間が。

例えば、会話をしている、ふとした瞬間に訪れる沈黙の間。どこまで踏みこんで聞いているのかわからない時の、言葉を選ぶ間。

歩いている時、並んで座っている時、いつだってそこにある、学習椅子一個分の間。

これはなりたての友達特有の間だろうか。それとも、あの子が作っている透明の壁？ はたまた自分の？

掴めない距離感。近いようで遠い、もどかしいすき間。

どうしようかといつも考え、私は今日も友の隣を歩く。

「あの子にあんまり近づかない方がいいよ。そうしないと、自分も周りから嫌われちゃうよ。」

突然クラスメートにそう告げられた。

まだ仲良くなりたてでしょ？ なら間に合うよ。そう言われた。

私の頭は一瞬フリーズして、それから今自分のすべきことをはっきりと理解した。クラスメートの話を軽く流して、私は急いでゴミ捨て場に向かった。教室や廊下にあの子の姿はなかったし、人数が少ない場所は、この学校にはここくらいしかな

かった。それに、万が一私物を捨てられるなどの実害が出ていたとしたら…….と思
ったからだ。

案の定彼女はそこにいて、声を押し殺すようにして泣いていた。幸い、実害は出て
いないようだった。

けれど、「ごめんね。」と無理に笑うその子はこれ以上ないくらい痛々しくて、私ま
で泣きそうになった。

仲良くなりたてだから何だというのか。それでも、友達に友達じゃないか。

アニメの主人公みたいにかっこいいことは言えなかったけれど、私が言える最大
限の言葉で、彼女は少しだけ笑ってくれた。

この一件は、担任の先生を巻き込んだ少し大がかりなものになって、梅雨入りす
る頃には、もうすっかり収まったと、友から聞いた。

相変わらず私達の中に存在する、間。けれど、黒板消し一個分くらいには縮まった
気がする。

いつか何でも相談し合えるようになって、このすき間がゼロになった時は、彼女
を親友と呼びたい。